ピースフェア 2023 を終えて

2014 年の第 1 回より 10 回目となる「千葉市平和のための戦争展 ピースフェア 2023 in 千葉」を開催しました。新型コロナウィルス感染拡大によりホームページで開催した 2020、感染防止に努めつつ再開した 2021、2022 と続き、今年はほぼコロナ以前に戻って多くの団体の皆様にご参加いただきました。フロアに拡がった皆様の歌声や演奏、厳粛な「千葉市空襲犠牲者」の読み上げに詩の朗読・朗読劇、腹話術・おしゃべりヴァイオリン・マジックに沸き上がる笑い声、本町小学校 6 年生の合唱や千葉朝鮮初中級学校の子どもたちの歌・ハンドベル演奏には来場者の温かいまなざしが注がれ、参加・来場者は延べ 1500 名を超え、平和のありがたさをしみじみと感じました。

展示では、千葉と広島の空襲・原爆の被害を受ける以前の「軍都」としてのそれぞれの歴史を振り返りました。2020 年に千葉市郷土博物館で「千葉市制 100 周年記念、令和 2 年度特別展」として開催された「軍都千葉と千葉空襲－軍と歩んだまち・戦時下のひとびと－」の写真集からいくつかの写真を提供していただき説明文を加えた展示では、明治 41 年から始まり拡大していった軍都としての歩みをたどり、軍施設が目標とされ市街地へと拡がった空襲被害地図との重なりを示しました。大変な準備を重ねられて実現した「特別展」の写真集の「はじめに」に記された千葉市郷土博物館館長・天野良介氏の『今を生きる我々が「平和の意味」を問い直し、「不戦の決意」を新たにする契機となることを願ってやみません』という言葉をご紹介させていただきます。

「8 月 5 日までの広島」の展示では、植松青児さん他 4 名の方が制作したパネルで、アメリカの歴史社会学者キャロル・グラック氏の「日本とアメリカで語られる原爆についての一般的な記憶は、 それぞれ半分ずつ抜け落ちている。両方の国が、原爆の物語を半分しか語らない。日本は、原爆投下の原因になった戦争そのものを強調しない。アメリカは、原爆によって犠牲になった人々と、戦後も何十年と続くことになる核の脅威を軽視している」という言葉を引用し、原爆投下以前の「軍都広島」が日清戦争以降の戦争で果たしてきた役割とこの国のアジア諸国に対する「加害」の歴史を示し、更に原爆犠牲者の中の朝鮮人労働者の存在と差別的な扱いなど、さまざまな問題提起をしました。それは空襲によって「焦土」と化した全国の都市の歴史に重なるもので、アジア太平洋戦争末期、軍隊がやって来て住民が総動員されて基地づくりが行われ、島ぐるみで戦場とされた沖縄の島々の悲劇につながります。戦争の「被害」と「加害」の両面を直視することが、これからを考える上で何よりも必要だと突き付けられた展示でした。

本町小学校と千葉朝鮮初中級学校の子どもたちの絵や文字の作品、戦争体験の出前講座を受けて描いた千葉デザイナー学院の学生の「戦争と平和」をテーマにした作品の数々がフロア中央で輝き、大きく掲げられた「日本国憲法前文」と「憲法の木」に、戦後 78 年、武器を持って戦争に参加せずにこられた背景として「日本国憲法」の存在の頼もしさを実感しました。「戦争を繰り返さないための集い」で群読された「あたらしい憲法のはなし」は、敗戦の後、民主主義の国として新たに歩みだすこの国の初々しい決意が、中学生に手渡される教科書の中に記されたものでした。

「ミサイル防衛」として沖縄を中心とした南西諸島に自衛隊基地や日米合同演習場が増設され、防衛予算の倍増や殺傷武器の輸出解禁も図られる中、参加団体の展示にも、戦争に向かうこの国への危機感と、人権が守られ誰もが幸せに生きられる社会への願いがあふれていました。この国はどこへ向かうのか、私たちは何をしたらいいのか、改めて考えさせられるピースフェアでした。

ちば・戦争体験を伝える会　市川まり子